

<論文>

フランス語における「雌馬 jument」再考¹ Jument “Mare” in French Revisited

川口 裕司
Yuji Kawaguchi

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies, Institute of Global Studies

要旨:

本稿では言語地理学上で重要だと考えられる『フランス言語地図』(ALF) No.736 jument 「雌馬」の地図について、約半世紀後に作成された言語地図との比較対照を行い、「雌馬」という概念とそれを表す語形について考察した。ALF No.736の地図は地理的分布が複数の言語層を示す典型例であり、言語層の形成には山地や大きな河川が関係している。ALFと『東部ラングドック地方言語民族誌地図』(ALLOr)の比較からは最も古い *ègo* 形が消滅したわけではないことがわかった。また、フランス語の書きことばコーパスを調べ、jument、cavale と他の語形の変遷を明らかにした。1300年以降に *ive* 形が周辺に追いやられ jument が支配的になった。同時に下位概念を表す *liarde*、*poutre*、*roncine*、*roncie* 形も衰退する。16世紀に南フランスあるいはイタリアから *cavale* 形が侵入し、書き言葉では jument と勢力争いを繰り返すが、わずか一世紀で周辺へ追いやられ、主に南フランスの方言の中だけで生き残った。

Abstract:

In this paper, we examine the concept of “mare” and its denomination in French dialects through the comparison of the *Atlas linguistique de la France* (ALF) No. 736 *jument* with some linguistic atlases published about half a century later. Map No. 736 is a typical example in which geographical distribution shows several layers of dialect forms. Mountainous areas and large rivers are closely involved in the formation of the layers. A parallel analysis between ALF and *Atlas linguistique et ethnographique du Languedoc oriental* (ALLOr) shows that the oldest layer of *ègo* did not disappear. In our diachronic corpus analysis of written French, the word *ive* was first driven to the periphery after 1300 and *jument* remained as a dominant form. *Liarde*, *poutre*, *roncine* and *roncie* which represented subordinate concept of “mares” also declined while *jument* prevailed. *Cavale* came in from southern France or Italy in the 16th century and fought against *jument* for one century in written French, but it was also marginalized and eventually survived in the dialects of southern France.

キーワード: 言語地理学、ALF、雌馬

Keywords: linguistic geography, *Atlas linguistique de la France*, jument “mares”



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ 本稿は JSPS 科研費 16H03415 基盤研究 B(研究代表者 岩田礼) 「語史再構における言語地理学的解釈の再検討—類型的定式化の試み—」の助成を受けた。本稿は第1回研究会(2016年9月20日)の報告「方言変異と地形—フランス地域別言語地図の場合—」に基づいている。

はじめに

言語地理学 *géographie linguistique* はジリエロン Jules GILLIÉRON とその弟子たちによる「言語地理学研究 *Études de géographie linguistique*」の発表を通して、20 世紀初頭のフランスで産声をあげ、少なくとも戦後のある時期まで言語学における新たな研究分野として隆盛を極めた。とりわけ歴史言語学における言語地理学の重要性を多くの研究者が指摘した。たとえばメイエ Antoine MEILLET は『歴史言語学と一般言語学』第 1 巻の中に「J. ジリエロンと地域口話研究がロマンス語化の発展に与えた影響」と題する章を設け、「こうして言語学にとって決定的な進歩が実現した。あらゆる歴史言語学は比較言語学的であり、同じ一つの共通言語から出た様々な口話の比較だけが、その共通言語を決定するのに役立つ」(Meillet 1921: 307)と称賛した。またメイエは『歴史言語学における比較方法』の第 6 章を言語地理学の解説にあて、「地理的方法を適用することができれば、どこでも決定的な進歩を得ることができた。(…)比較方法は地理的方法によって、それまでにはない精緻さ、広がり、容易さを獲得する」(Meillet 1925: 70)と述べ、ジリエロンの功績を高く評価した。ガミルシェク Ernst GAMILLSCHEG も『言語地理学とその一般言語学に対する寄与』の中で、ジリエロンの功績として以下の 3 点を指摘した。①ジリエロンは『フランス言語地図 *Atlas Linguistique de la France*』(以下 ALF)を公刊することで方言研究に新たな研究材料を提供した。②新しい地理的な観察方法を提案し、その方法を洗練させた。③パリの高等研究実習院 *École Pratique des Hautes Études (EPHE)*でのセミナーを通じて後進を育てた²。

こうして始まった言語地理学は、本人が「ジリエロンの後継者」³と呼ばれることをどう思ったかは別にして、フランスではドーザ Albert DAUZAT が言語地理学の理論的枠組みをさらに探求し『言語地理学 *Géographie linguistique*』(Dauzat 1922)にまとめた。1922 年版⁴の『言語地理学』pp.30-32 (そのうち p.31 は地図)と pp.92-93 に「雌馬 *jument*」に関する言語地理学的解釈が掲載されている。この ALF No.736 *jument* の地図は、言語地理学において数ある地図の中でも重要な意味をもっていると思われる。たとえばコセリウ Eugenio COSERIU の『言語地理学』(Cosériu 1975)においても引用され、また近いところでは ALF の地図をどのように解釈すればよいかを平易に説いたブラン・トリゴ Guylaine BRUN-TRIGAUD、ル・ベール Yves LE BERRE、ル・デュ Jean LE DU (以下 ブラン・トリゴ他)による『ジリエロンとエドモンの ALF を読む 時間から空間へ』(Brun-Trigaud et al. 2005)にももちろん取り上げられている。興味深いことに、ドーザ、コセリウ、ブラン・トリゴ他のいずれもが ALF No.736 の言語地図を掲載しているのだが、どういうわけか地図の細部が微妙に違っているように見える。ここでは *jument* の問題を考える取っ掛かりとして、そうした細部は気にせず、最も新しいブラン・トリゴ他の地図を用いて、彼らの言語地理学的説明を見ておこう。

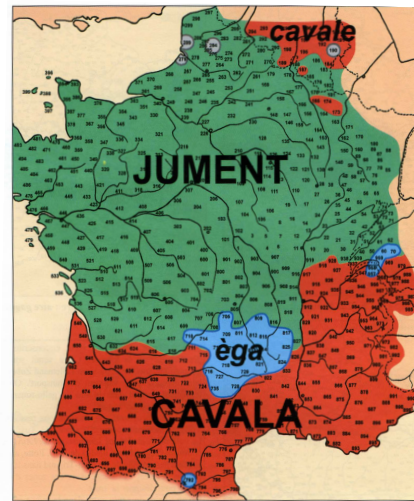
² Gamillscheg (1928: 2).

³ 未見だが Anne-Marguerite Fryba-Reber に“Dauzat et Jaberg : deux héritiers de Gilliéron”, in *Actes du Colloque Dauzat et le patrimoine linguistique auvergnat*, Montpellier, 2000, 211-230 の論考がある。

⁴ 1944 年版は *jument* の部分については同じ記述であるが、他の箇所に対応する書き直しや追記が見られるため注意が必要である。邦訳、『フランス言語地理学』、松原・横山訳、大学書林、1958 年は、内容から 1944 年版の邦訳であることがわかる。

「南部の èga (古フランス語 *ive*、ラテン語 *equa*) の地域が最も古く、第一の形成である。この語は至るところで衰退し、中世以来その地歩を失い続けてきた。その後イタリアから *cavala* がやって来る。この二番目の形成は南フランスとリヨン地方に広がり、さらにオーヴェルニュ地方とワロン地方に至った。jument の地域変種が発達したヴォージュ地方を除けば、東部ではリヨンからリエージュまでかつては連続する地域であったに違いない。最後に雌馬を意味する jument がパリに到達すると、そこから広い領域に伝播していく。この三番目の形成は東部地域をいくつかにも分断し、リヨン地方に達し、オーヴェルニュ地方、アン県、イゼール県の *cavala* から切り離され、伝播の先端はアルプス地方にまで至った。」

ブラン・トリゴ他の解釈は最も明解で簡潔なものと言える。ブラン・トリゴ他では èga の語に対して第一の(言語層の)形成(*formation primaire*)という表現を用いている。ドーザも「語の層位学を決定する」(Dauzat 1922: 32)、「各層の位置を容易に再建する」(Dauzat 1922: 33)のような表現からわかるように、èga、cavala、jument を三つの異なる言語層として説明する。こうした言語層を研究することの重要性はジリエロンの論考からも明らかである⁵。いずれにしても jument の地図はドーザが言う意味での言語地理学的な原則を非常に明瞭な形で表している。それゆえ重要な地図と言える。言語地理学の原則とは以下の三つの原則を言う。①ある語の現在の地理的分布を観察することで、語の歴史と埋没している語の諸層を再構築できる、②現在の地理的分布を観察することで、今は分断されて分布している語がかつては連続する区域に広がっていたことがわかる、③語の革新は主として中央地域で起き、その結果、側面地域には古い形態が残る⁶。これら三つの原則を jument の地図で確認することができる。つまり èga が最古層であり、分断されている東部の cavala は第二層として、かつては南北で繋がっていた。また東部において cavala が側面地域として残存したのは、第三層である jument の革新が伝播した結果である。この有名な地図の解釈について、今更何を付け加えることがあるのだろうかと思う方がおられるかもしれない。しかしながら jument の語は上記のような単純な地図の解釈では解決できない非常に複雑な問題を孕んでいると思われ、今日でもその問題を問い直す意味は十分にあると考える。ここでは主として二つの観点から「雌馬 jument」について再考する。最初に ALF から半世紀ほど経った時点での方言調査の結果について述べる。次に「雌馬」という概念とそれを表現するための語形の問題について考える。



ブラン・トリゴ他 2005: 102.

1. ALF の半世紀後

フランスは国土の 10%だけが 800m を超える山地であり、概して起伏が少ない。なかでも北部と西部には高地が少なく、海拔の高い地域は中南部と南西部と東部に存在する。このうち中南部には中央山塊 *Massif Central* と呼ばれる高地があり、最古層と考えられる èga が残る地域とぴったり一致する。中央山塊は ALF の中で、しばしば古い語形が分布する地域として知られる。たとえばブラン・トリゴ他による

⁵ たとえば Gilliéron et Mongin (1905: 3)を参照。

⁶ この側面地域の原則はジリエロンではなくユートとバルトーリによって提案されたようだ。Dauzat (1944: 48).

と7、ALF No.36 alouette「ひばり」では接尾辞-etteをとらない、ガリア語の alauda に直接に遡る alausa 形がこの地域で見られる。ALF No.244 charpentier「大工」では、ラテン語の fustus から派生した fustier 形が、ALF No.629 gauche「左」では中央山塊地域にバスク語と関係する esquèr 形が、ALF No.791 maçon「石工」では peirièr 形が分布し、ゲルマン語**makôn* に由来する他の地域の語形とは一線を画している。ブラン・トリゴ他によれば、これらの地図では山地という地形が原因となって、中央山塊に古い言語層が残ったという。東部の山岳地帯でも同様のことが起きる。

1.1. 中央山塊言語民族誌地図(ALMC)

まずは中央山塊の半世紀後を見てみよう。ノートン Pierre NAUTON は 1951 年から 1953 年にかけて中央山塊地域を方言調査した。ALF と ALMC は図 1 と図 2 のようになる。

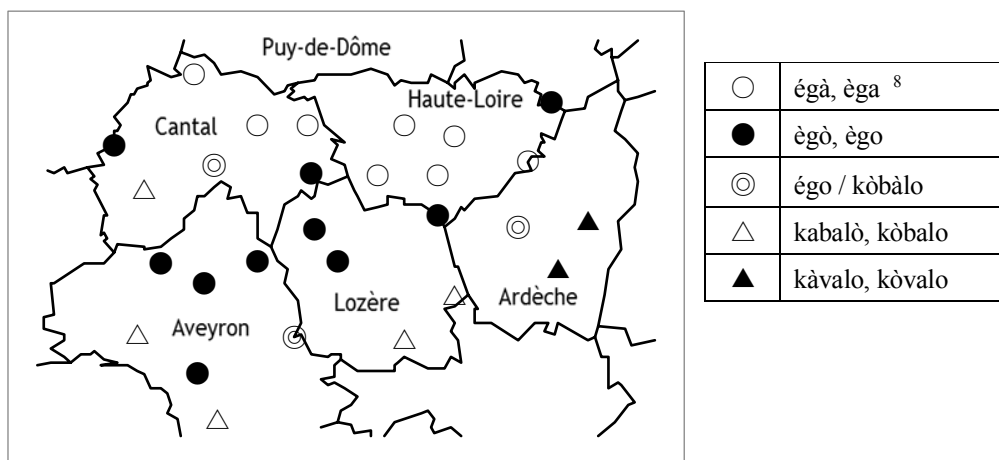


図 1 ALF 736 jument⁹

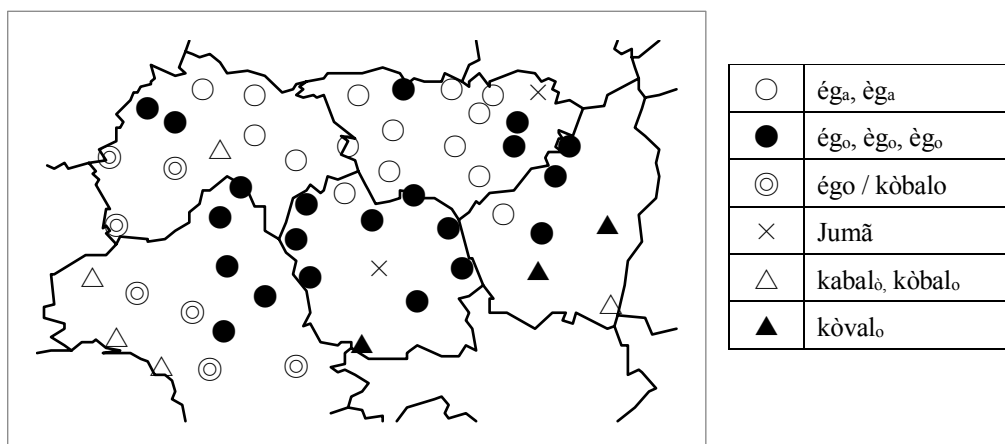


図 2 ALMC 469 jument

⁷ Brun-Trigaud (2005: 98, 103).

⁸ 音声記号は若干の補助記号を除き、できる限り言語地図の音声記号に近づけるよう努めた。

⁹ エドモン Edmond EDMONT がこの地域の調査において強勢と長母音を混同して記載したことについては Nauton (1956:48)を参照されたい。

ALMC の調査地点が 55 地点に対して ALF は 28 地点であるため単純に比較することはできないが、全体として半世紀経った時点でも èga、égo 形 (図 1・2 の○●) は生き残っているとえよう。ALF ではアヴェロン県 Aveyron の地点 728 とカンタル県 Cantal の地点 717 の 2 地点だけが西部において égo と kòbalo を併用する地点 (図 1 の◎) であったのに対し、ALMC の地図では西部で併用地点 (図 2 の◎) が増えている¹⁰。このことは ALF から半世紀経った ALMC では égo 形がいよいよ消滅に向かい、kòbalo 形に取って代われつつあることを示している。ところで一般に ALMC の地域は図 3 のように三つの方言域に区画されるのだが¹¹、èga、égo はこうした方言域の区分には関係なく、中央山塊全域で生き残ったことがわかる。他方でアヴェロン県とカンタル県を含む南部オック語域から徐々に égo 形が kòbalo 形に置き換わろうとしている。また ALMC では 2 地点だけであるが jument 形も観察される (図 2 の×)。これも半世紀の間に起きた方言状況の変化である。

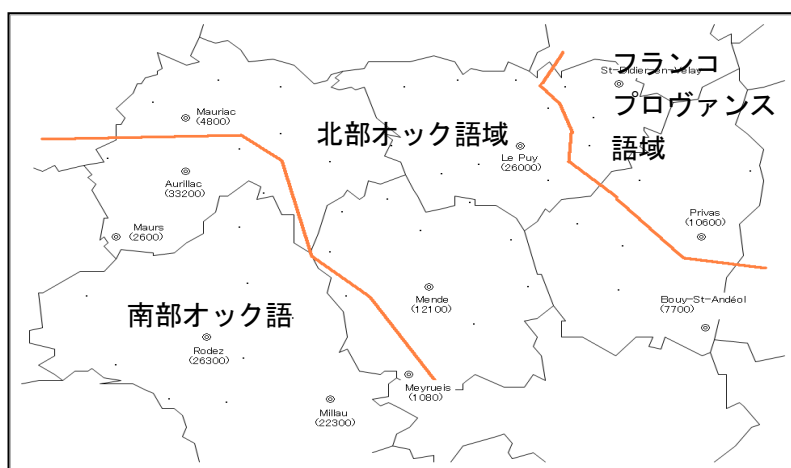


図 3 ALMC の言語域¹²

ところでフランスがガリアと呼ばれていた時代から現在に至るまで èga、égo 形が維持された主たる要因は中央山塊の地形だけではない。ドーザは『言語地理学』を執筆する 8 年前に動物の雌雄を表す語形について考察している。フランス語では動物の雌雄はロバ(âne / ânesse)、猫(chat / chatte)、ライオン(lion / lionne)のように、しばしば派生形によって表される。ところが馬(cheval / jument)、羊(mouton / bélier)、豚(porc / truie)、鶏(coq / poule)、ガチョウ(jars / oie)のように、雌雄を表す語形が大きく異なる場合もある。同論考の中でドーザは jument についても述べており¹³、『言語地理学』の説明はこの論考の内容を要約したものである。ドーザによれば jument は元々南フランスでも北フランスでも荷物などを運ぶ「荷馬 bête de somme」を意味した。ラテン語の equa 形は規則的な音変化によって ive 形となったが、ive 形は形態的に摩滅して弱く、女性形の接尾辞-ive (例、active) と同音衝突を起こしたために消滅する運命にあった¹⁴。北フランスで ive の消失を補ったのが jument であり、南フランスでは cavala であった。一方、音変化を経ても摩滅しなかった èga 形は中央山塊と東部地域の一部で生き残った。ジリエロンもドーザも

¹⁰ ALF のカンタル県の被調査者は補助教員で 30 代と若い。Gilliéron et Edmont (1902: 48).

¹¹ 例えば ALMC No.9 il fait chaud の fait の母音と chaud の語頭子音について、北部オック語域では[fai] と [ts-, tc-] となるが、南部オック語域では[fo] と [k-] になる。

¹² Nauton (1956: 43) の地図を ALMC No.9 il fait chaud の分布も加味して修正した。

¹³ Dauzat (1914: 161-169).

¹⁴ 規則的な音変化によってラテン語起源の語が多く消失したことはジリエロンが力説したことである。Pop (1959: 29).

同音性は語の歴史にとって決定的な要因であり、同音衝突は言語地理学の最も重要な発見であったと考えた¹⁵。もっとも同音衝突があれば直ちに語形が消失し、他の語形に置き換わるわけではない。実際、言語活動においては同音性・同形性は頻繁に起きることであり、文脈のおかげで許容される場合が多い。問題はむしろ同音衝突によって同じような部類に属する語の間で混同が起きることである¹⁶。ジリエロンは「許容しがたい困難を経験した後に同音異義語に処方を与えようとする」¹⁷と主張しているが、言語地理学における同音衝突の例では、実際に話し手において混同や困難が起きた証拠をあげながら説明することはほとんどない。またジリエロンは同音衝突によって治療的処方が必要とされる言語の病理的状态にしか興味がなかった¹⁸。彼らの同音衝突による語形変化の説明を読んでも、それによって語形の有為転変の原因が解明されたと考えてよいのかは疑問が残る。また語の地理的分布に着目するあまり、語と事物の結びつきを中心に据えてしまうことで、言語地理学の説明はあたかも話し手の言語活動から独立した形で語形変化が生じているような印象を受ける。このことはジリエロンらの分析に対する批判の一つでもあった¹⁹。ただし言語地理学では、二つの語形が衝突する地域で折衷形あるいは類音牽引による語形成が観察されると指摘する。また消失する語形は意味的に曖昧になったり、多くの意味を抱え込んだりするという指摘がある。こうした証拠こそ、同音衝突が語の消失や語形変化の要因となったことを説明するうえで重要であると考えられる²⁰。

1.2. リヨネ地方言語民族誌地図(ALLy)

ところで *èga*、*égo* の東部境界はどこなのだろうか。中央山塊の東に位置するリヨネ地方を ALLy を利用して見てみよう。ガルデット Pierre GARDETTE がこの地域を調査したのは 1945 年から 1947 年にかけてであった。ALF が 17 地点だけを調査したのに対して、ALLy には 75 地点あり、かなり密な方言調査になっている。とはいえ半世紀後でもそれほど大きな変化は見られない。図 4 と図 5 を参照。

ALLy ではロワール県 Loire とローヌ県 Rhône の両方に *jument* (図 5 の×) が拡大している。一方で *égo* 形 (図 5 の○) はオート・ロワール県 Haute-Loire のみに、*kàvâla* 形 (図 5 の△) はピュイ・ドゥ・ドーム県 Puy-de-Dôme と東部に見られる。またアン県 Ain には *jument* が拡がりつつあり、半世紀の間に標準形の浸透した様子がうかがえる。ALLy の地図が示すように、*èga*、*égo* 形の東部境界はオート・ロワール県であり、それよりも東に *èga*、*égo* 形は存在しない。逆に言えばリヨネ地方は北からの *jument* と南からの *kàvâla* がぶつかり合う地域なのである。標準形の *jument* がリヨネ地方にまで進出したことで *kàvâla* 形の地域は東西に分断された。古い *èga* 形の東端はオート・ロワール県に、新しい *jument* の南端はロワール県にまで達している。ドーザが主張するように、語はデタラメに伝播していくわけではない。中でも標準形の伝播は比較的明確な経路を通して拡がるということが知られている。フランスの場合、大幹線はソーヌ河とロワール河の溪谷である。もちろん大きな川は河川交通によって伝播を促進することもあれば、逆に大河によって言語が分断されることも考えられる²¹。

¹⁵ Dauzat (1922: 65).

¹⁶ Gamillscheg (1928: 34).

¹⁷ Gilliéron (1918: 58).

¹⁸ Lauwers (2002: 85).

¹⁹ 例えばコセリウ (1973: 103) と Demset (2002: 42).

²⁰ Lauwers は「同音性と意味の過剰飽和(l'homonymie et la sursaturation sémantique)が語形変化において疑いもなく役割を演じている」と主張する。Lauwers (2002: 105).

²¹ Dauzat (1922: 157), 160. Kawaguchi (1995, 2001, 2017) はパリ周辺部、シャンパーニュ地方、ブルゴーニュ地方における標準語化とその経路を分析した。そこでも河川の果たす役割が大きい。

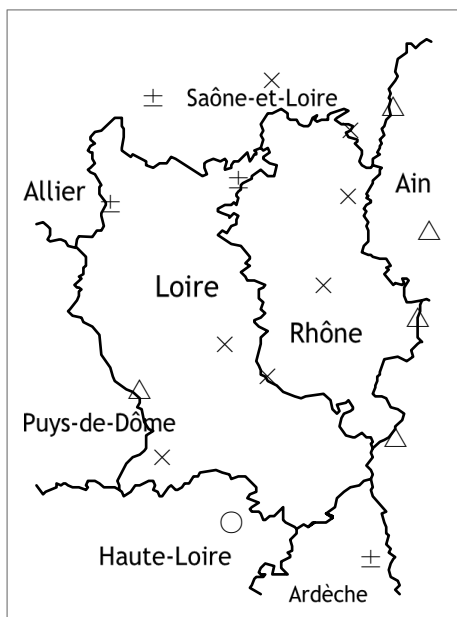


図4 ALF 736 jument

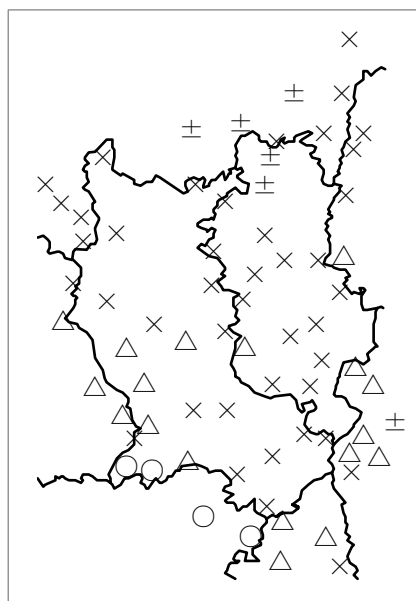


図5 ALLy 311 jument

×	Jumã
○	Ègó
△	kàvâlà, kavâlè
±	dzumã, dzœmã, etc.

×	jumã
○	égã
△	kàvâla, kàvâlo
±	dzumã, zumã, etc.

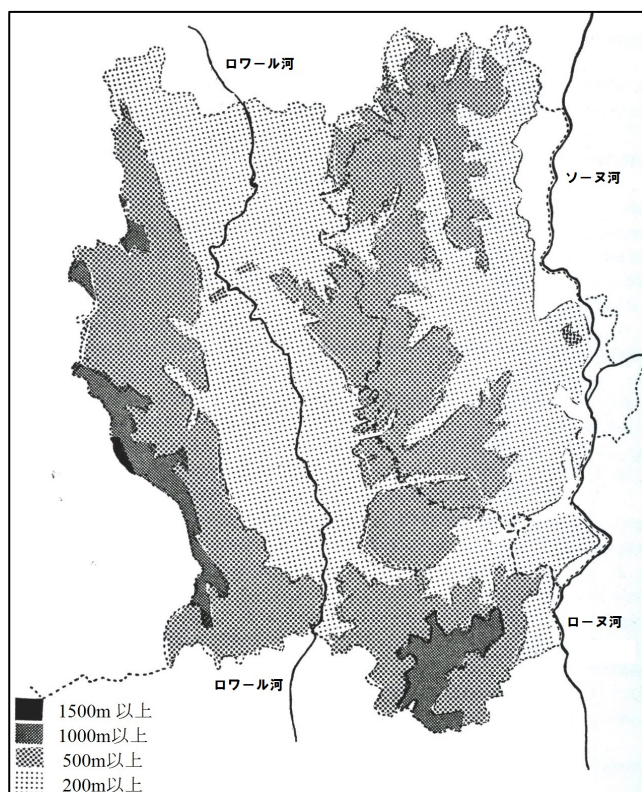


図6 リヨネ地方の地形²²

²² ALLy の Carte 1. Carte du relief du Lyonnais を編集した。

図6の地形図と ALLy No.311 の *jument* 形 (図5の×) の分布を照らし合わせてみると、*jument* 形が東部ではソーヌ河とローヌ河の渓谷を通じて、西部においてはロワール河の渓谷を通して、北部から南部へと伝播したことは十分にあり得る。また ALLy の *kávàla* 形 (図5の△) と *égà* 形 (図5の○) はロワール河とローヌ河のそれぞれの西側にある比較的高い山地で生き残っている。標準形の *jument* はリヨネの南部にまで伝播し、ローヌ河の西側にある山地で止まり、ロワール河方面では *égà* 形と *kávàla* 形の両方に行く手を遮られた。こう考えると中央山塊よりもさらに南では *jument*、*kávàla*、*èga* はどのようなになっているのかも気になってくる。ここでは東部ラングドック地方言語民族誌地図 (以下 ALLOr) について調べた。すると ALF から半世紀後の興味深い状況がわかった。

1.3. 東部ラングドック地方言語民族誌地図(ALLOr)

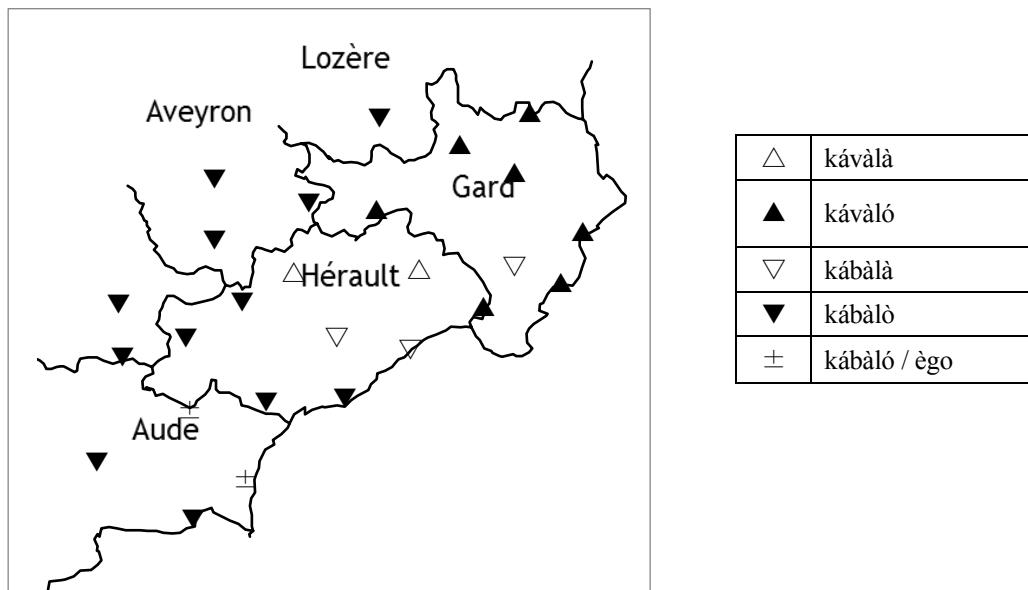


図7 ALF 736 *jument*

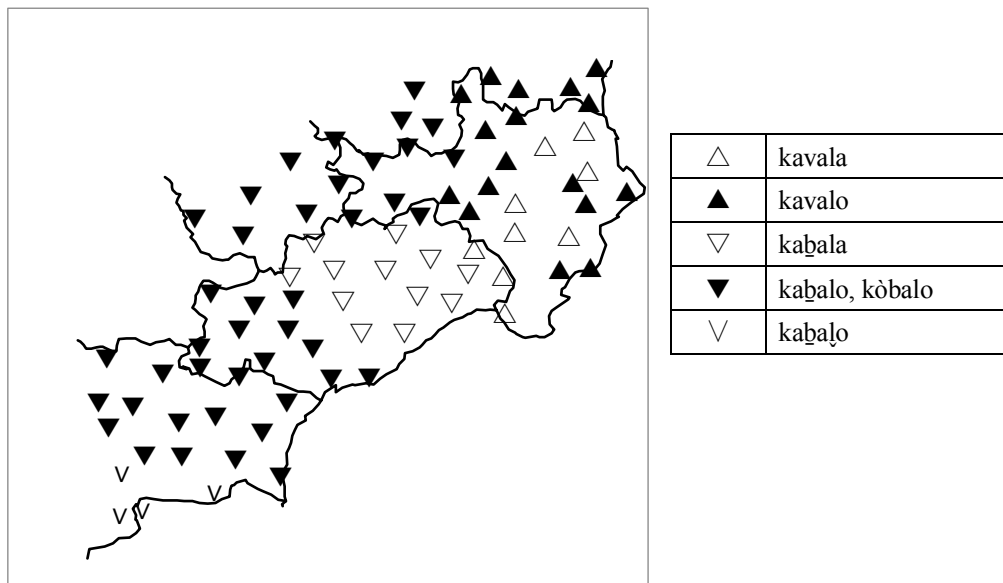


図8 ALLOr 501 *jument*

ALLOrにおいて、語末母音はエロー県 Hérault とガール県 Gard では[a]になる (図8の白い△▽)。またガール県 (図8の△▲) 以外は母音間の子音が[v]ではなく [b]²³になる (図8の下向き▽▼▽)。こうした傾向はALFの半世紀後でも変わっていない。ALLOrでは kavala、kaḃala あるいは kavalo、kaḃalo が支配的であると片づけてしまいそうであるが、実際はそうではなく変化は着実に起きつつあった。

ALF と ALMC の地図を分析した際に、アヴェロン県とカンタル県において égo と kòbalo を併用する地点 (図1、図2の◎) がALFに比べてALMCで増えたことを指摘した (1.1.を参照)。これは égo 形が消滅へと向かい、kòbalo 形に取って代われつつあることを示していた。図7のオード県 Aude ではこれと全く逆のことが起きている。地点767と787において kábalo が égo と併用されるのである (図7の±)。この2地点の被調査者は35歳と40歳くらいの市町村職員で、両者とも同地の生え抜きであった²⁴。とくに特徴的な話者とは思えないこの2名だけが、なぜ kábalo と égo を併用すると答えたのだろうか。その答えがALLOrの地図の中にあった。実はALLOr No.501の地図には欄外に「古い èga²⁵は、その存在と意味をいたるところで確認できた²⁶」という注記がある。古い èga を中心にALLOrを再分類し直してみると図9のようになる。

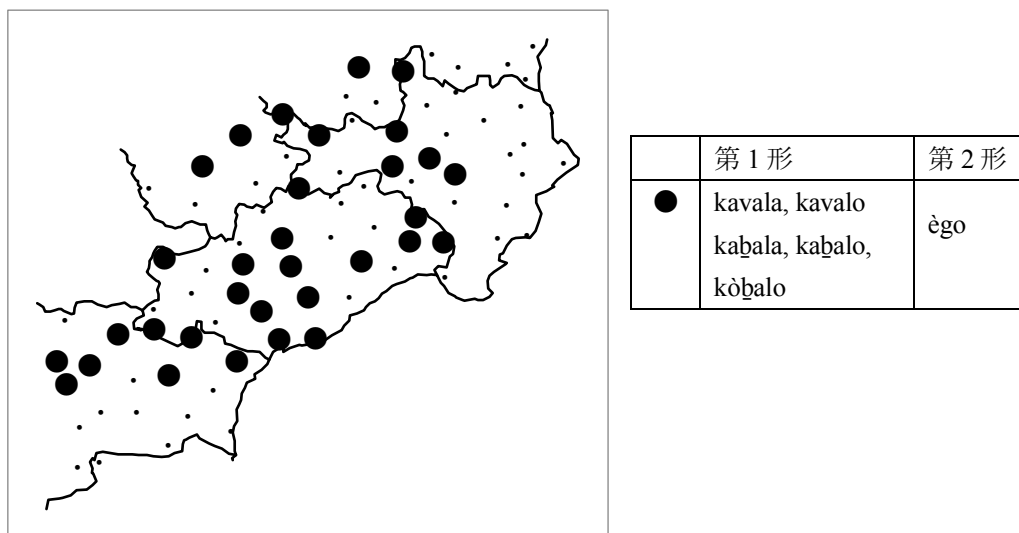


図9 ALLOr 501 jument ègo の残存

もちろんALLOrで kavala 形が第一形であることには違いないが、ALFで地図に2地点しか記載されていない古い ègo 形は完全に消失したわけではなく、その存在と意味がまだ確認できる状態であった。ègo 形はこの地域でまだ理解されていたのだが、徐々に kavala 形に圧倒されて消滅に向かいつつあった。だからこそALFの地点767と787で併用形が観察されたのだった。エドモンがALF調査の際に、なぜ ègo 形が他の地点でも理解されていたのを知らなかったのか、その理由はよくわからない。ALFの補遺にも特に記載はない。

²³ **b** は幾分弛緩した閉鎖音、軽い狭窄音を表す。ALFではこの調音は正しく認識されなかった。

²⁴ Gilliéron et Edmont (1902: 49).

²⁵ 興味深いことだが Boisgontier は実際に確認される [ègo]ではなく、èga という語形を用いて注記した。Boisgontier (1984) ALLOr No.541 Jument ; «Èga»を参照。

²⁶ “(...) le terme archaïque èga, dont on a partout vérifié la présence et les valeurs sémantiques.”

2. 文献的証拠と言語地図

ジリエロンとドーザの最も際立った研究手法の違いは、文献的証拠と言語地図をどのように関連づけるかという視点であろう。ジリエロンは「文献を探求して得られることになる事後的な実証がどのような重要性をもつとしても、それらは地理的方法によって到達する結果を例示するに過ぎず、強固にするものではない。たとえそうした実証が欠けているとしても、地理的方法による結果は確実かつ疑う余地のないものと見なされなければならない」²⁷と主張する。これに対してドーザはミツバチを意味する *essette* をとりあげて、「言語地理学と文献研究は、まさに歴史と地理のように緊密に連帯しあう」²⁸と述べる。初期の研究においてジリエロンは再三にわたり、ALF 以外の方言調査と文献的証拠の価値を問題視した。こうした発言の背景には地理的方法だけを用いて言語理論を構築したいというジリエロンの強い思いがあったのだろう。とはいえ後にも触れるが、ALF の「雌馬」の地図が私たちに示してくれる語形の変異とその分布の限界は、まさに ALF の方言調査自体の限界に帰されるべきものであり、その限界を乗り越えるための一つの手段として ALF 以外の方言調査と文献的証拠の活用は不可避であると言わなければならない。

2.1. JUMENT 形と CAVALE 形

最も新しい言語層と言われる *jument* の出自はどうなっているのだろうか。「国語の主人 *maître de la langue nationale*」²⁹たるパリで産声をあげたのだろうか。この語形は 12 世紀中頃に書かれたアングロ・ノルマン文学の *Psautier d'Oxford* において「荷馬」の意味で男性名詞として用いられたのが最初らしい。一方「雌馬」の意味としては、Guernes de Pont-Saint-Maxence が 1172-74 年にイギリスで執筆したとされる *Vie de Saint Thomas Becket* に女性名詞として初出する。つまり初期の文献的証拠はいずれもイギリスでみつかったことになる³⁰。これに対してラテン語の *jumentum* を女性形 *jumenta* として用いた例は 8・9 世紀に既に見られる³¹。この古い女性形に由来するか、もしくは類似の派生形と思われる語形が ALF に散見される。ムルト・エ・モーゼル県 Meurthe-et-Moselle の地点 150 *jœma*³²、ヴォージュ県 Vosges の地点 59 *jœmôt*³²、69 *jmôt*、77 *jümát*、86 *djümåd*、バ・ラン県 Bas-Rhin の地点 88 *jümát*、オ・ラン県 Haut-Rhin の地点 85 *djümát* である。これらの語形はフランス東部にのみ残存する³³。

フランス語の書き言葉の歴史において *jument* 形と競合して用いられたのは *cavale* 形であった。本稿の最初で見たように、近代以降になると *cavale* 形は方言として南フランスと北部でのみ残存したようである。この *cavale* の語源はプロヴァンス語であったという説、イタリア語から移入されたという説がある³⁴。いずれにしてもベルギーのヘントの南にあるアウデナールデにおいて 1552 年に書かれた *Coutume de Renaix* が初出のようであるから、南フランスだけに特徴的な単語ではなく、言語地理学が説明するように、かつてはベルギーから南フランスにかけて広く分布していたに違いない。

ここでは *jument* と *cavale* の書き言葉における競合関係を詳しく調べるために、Frantext を基にして 100 万語あたりの両語形の調整頻度の推移を 1330 年から 1800 年まで追った。ただし 1501-1550 年と 1551-1600 年に関しては、理由はよくわからないが、特定の文献における *jument* の頻度が著しく高いた

²⁷ Gilliéron et Mongin (1907: 296).

²⁸ Dauzat (1922: 43).

²⁹ Gilliéron (1918: 259).

³⁰ 13 世紀以前における古仏語作品の作成地域には大きな偏りがあったことを忘れてはならない。

³¹ 初出に関しては *Trésor de la langue française informatisé* (<http://atilf.atilf.fr/tlf.htm>): *jument* の項を参照。

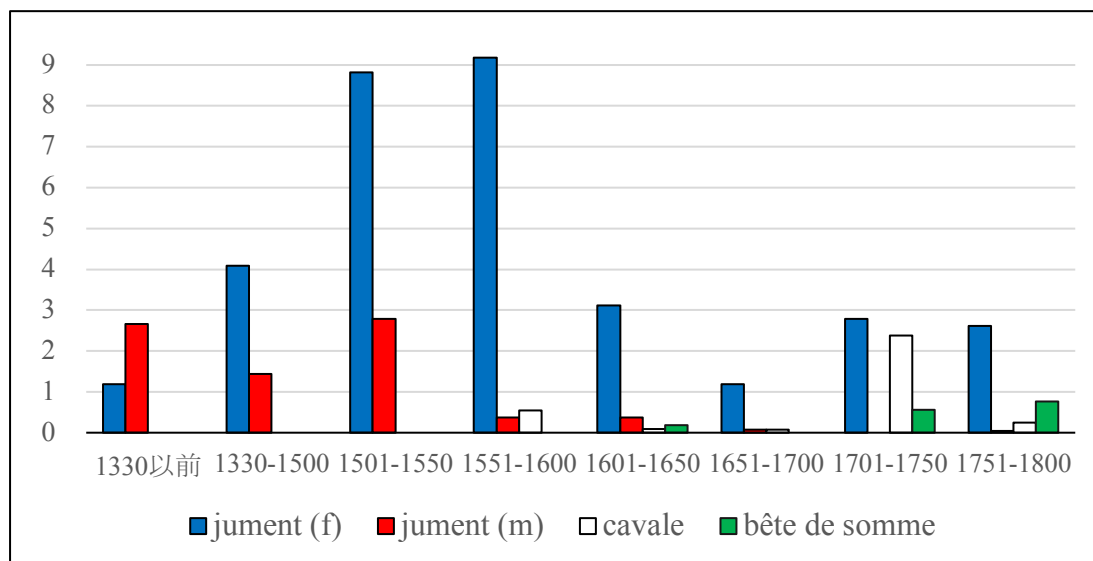
³² 接尾辞-*ôt* は-*èt* 形のこの地域における変異形である。-*èt* 形が-*ôt* 形になる音声変異はシャンパーニュ地方の南東部からフランス東部にかけて広く分布する。Kawaguchi (1994) 参照。

³³ 接尾辞-*ôt* はジャガイモを *pmôt*、*kmôt* と呼ぶ場合にも見られる。Poirot (1913) を参照。

³⁴ *Trésor* と FEW の項目を参照。

め、そうした文献を除いて Frantext の年代区分に従って生起頻度を計算した。結果は表 1 のようになる。

表 1 jument と cavale の生起頻度 (100 万語あたりの調整頻度³⁵)



まず最初に、明らかに女性名詞と判断できる jument 「雌馬」(表 1 の青色) と女性名詞とは判断できないか、あるいは冠詞類や形容詞から男性名詞と判断すべき jument 「荷馬」(表 1 の赤色) の生起頻度が古フランス語から中期フランス語へと移る時期、グラフ上の 1330-1500 年までの間に逆転することがわかる。1500 年以後は女性名詞 jument が明らかに優勢になる³⁶。男性名詞 jument は 1651-1700 年にほぼ消滅し、それに代わって 1700 年以降に bête de somme 「荷動物」(表 1 の緑色) という表現が増える傾向にある。このことは男性名詞 jument の消滅過程を証拠づけるものとして注目に値する³⁷。女性名詞 jument と cavale (表 1 の白色) の競合は 1700 年から 1750 年までをピークに、その後 cavale の衰退に終わる。Frantext が各時代の書き言葉のデータベースであることを考慮するならば、cavale 形は 1700-1800 年までの一世紀の間、標準的なフランス語の書き言葉として通用していたことになる。以上が Frantext のデータから指摘できることである。

しかし実際には 1700 年よりもずっと早い時期、たとえば 1618 年に文法家のモーパ Charles MAUPAS が *Grammaire et syntaxe française* (初版 1607 年)の中で、「jument と cavale は hongre とも言う、去勢した馬の

³⁵ 実際の生起数は以下のものであった。

	jument (f)	jument (m)	cavale	bête de somme		jument (f)	jument (m)	cavale	bête de somme
-1330	4	9	0	0	1601-1650	34	4	1	2
1330-1500	40	14	0	0	1651-1700	16	1	1	0
1501-1550	19	6	0	0	1701-1750	35	0	30	7
1551-1600	50	2	3	0	1751-1800	62	1	6	18

³⁶ ただし 1600 年以前のデータには男性名詞 jument (m)の中に、冠詞類や前後文脈から jument が女性名詞であると判断できない例 (cheval et jument、冠詞なしで単に jument 等) 例も含まれる。

³⁷ bête de somme はすでに 12 世紀末に「荷動物」として Bérout の *Le Roman de Tristan et Iseut* に記録がある。Trésor の somme の項。

ことである」³⁸と記している。またドウ・ラ・トゥシュ Pierre DE LA TOUCHE は 1730 年の *L'art de bien parler françois* (初版 1696 年)の中で、さらに詳細に「通常、親しい会話では *jument* と言う。Cavale は上品な文体のほうがふさわしい。アカデミーはこのような使用を区別しない」³⁹と述べた。ドウ・ラ・トゥシュのこの説明はメナージュ Gilles MÉNAGE の *Observations de Monsieur Ménage sur la langue françoise* (初版 1672 年)の次の記述の引用であった。「親しい会話では、*une cavalle* よりもむしろ *une jument* と言うだろう。王の厩舎でもアカデミーでもそうである。しかし上品な文体では *jument* よりも *cavalle* と言うだろう」⁴⁰。

2.2. 古フランス語から中期フランス語へ

ところで Frantext が十分にカバーできていない時代、とくに古フランス語期から初期の中期フランス語までの間、「雌馬」は書き言葉においてどんな語形で表されていたのだろうか。トブラー・ロマッチ TOBLER-LOMMATZSCH の『古フランス語辞典 *Altfranzösisches Wörterbuch*』(以下トブラー・ロマッチ)を調べたところ、次のような語形が見つかった。まずラテン語の *equa* から変化したと考えられるいくつかの変異形、*ive*、*ie*、*iewe*、*egue*、*igue* がある。次に *jument* があり、「灰色毛の雌馬」として *liarde*、「若い雌馬」を指す *poutre*、最後に「荷馬」としての *roncine*、*roncie* があつた。これらの語形の使用をさらに詳細に調べるために、古フランス語と中期フランス語のコーパスと考えられる *Corpus de la littérature médiévale en langue d'oïl des origines à la fin du XV^e siècle Prose narrative – Poésie – Théâtre*, Champion Électronique, 2001(以下 *Corpus Champion*)を調査した⁴¹。最も生起頻度の高かったのは *jument* であり 111 例あつた。このうち 1300 年以前が 42 例、14 世紀・15 世紀が 69 例あつた。男性名詞 *jument* の例は 6 例みつかった。冠詞類や形容詞等がないために、あるいは周りの文脈から文法性を判断できない例は 27 例あつた。

Corpus Champion において *jument* の次に生起頻度が高かったのは *ive* 形の 12 例である。この語形は全て 1300 年以前の文献で見つかった。*ive* 形が古フランス語の時代において、女性形の接尾辞 *-ive* と同音衝突することでどれほどコミュニケーションに支障が出たのかは皆目検討もつかない。ただ先ほどの生起頻度からすると、古フランス語の時代にも書き言葉では *jument* 形が圧倒的に頻繁に用いられていたため、*ive* 形が衰退しても「雌馬」を表すのに *jument* を用いておればおそらくコミュニケーションに支障はなかったであろう。ともかくも 14 世紀までに *ive* 形が書き言葉から消失したらしいという推測が成り立ち、このことは 2.1. で見たように、1330 年頃にはすでに *jument* 形だけが支配的になっていた事実と矛盾しない。また *ive* の変異形である *igue* 形は一例しか見つからない。このように *jument* はいわば「雌馬」の最上位概念を表す語形と言える。同じ「雌馬」でも色に焦点を当てると *liarde* 「灰色毛の雌馬」、職能をハイライトすると *roncine*、*roncie* 「荷馬」、年齢を取り立てると *poutre* 「若い雌馬」となり、これらはいずれも「雌馬」の下位概念を表す語形であつた。

2.3. Poutre 形について

ラテン語 *pullus* 「小動物」の派生形 **pulliter* に由来すると思われる *poutre* はトブラー・ロマッチの定義

³⁸ “*jument*, *Cavale*, se dit aussi *Hongre*, se dit d'un Cheval *chasté*,” (Classique Garnier Numérique).

³⁹ “On dit d'ordinaire *jument* dans le discours familier: *cavale* vaut mieux dans le style relevé. L'Acad. n'en distingue point l'usage.” (Classique Garnier Numérique).

⁴⁰ “Dans le discours familier, je dirois *une jument*, plustost qu'*une cavalle*. C'est ainsi qu'on parle dans les Ecuries du Roi, & dans les Académies. Mais dans un discours relevé, je dirois *cavalle*, plustost que *jument*,” (Classique Garnier Numérique).

⁴¹ 当該コーパスは Champion 社から出版された中世文学等の校訂本を電子化したものだが、校訂本自体に質的なばらつきがあることは否めない。

では「仔馬」、「若い雌馬」、「梁」を意味する。Corpus Champion では4例みづかり、全てが15世紀以降の例で、女性名詞すなわち「若い雌馬」である。この語彙について比較的詳しく記載しているのはゴドフロワ Frédéric GODEFROY の辞書⁴²で、そこには *poutre*、*poultré*、*poustré*、*poudre*、*pouldre* の五つの語形が記載され、「未交尾の雌馬」を指すとある。1472年の文献が初出である。ゴドフロワは項目の最後のほうでこう締めくくる。「未交尾の雌馬を表す *poutre* は一般的な言語においては17世紀一杯まで用いられた⁴³。18世紀にはポワトゥー地方のテキストに現れる」。15世紀後半から16世紀まで書き言葉において用いられ、その後は方言にしか残らなかった短命な語形である。Corpus Champion を検索すると *poultré* 形が3例みづかったが、出典は全てラブレール François RABELAIS であった。ドーザも既に指摘したように、この語形は低地ロワール河地方の16世紀の作家たち、ラブレール、ロンサーール RONSARD、ペロー Rémy BELLEAU の作品の中にみづかる⁴⁴。この語形について最も詳細な分析を行ったのはおそらくユート Jakob JUD であろう⁴⁵。ユートの研究を引用してガミルシェークは次のように言う。「ユートは、ある語が特定の社会層から他の社会層に侵入すると、副次的な同音異義が生じることを「梁」をあらわす語を使って証明した。(…)中期フランス語の *poutre* 「未交尾の雌馬」は16世紀には文語から姿を消す。ALFによると、今日この語は最北部と最東部のわずか4地点で見られるにすぎない。この語が大部分の領域で消失したのは、14世紀の終わりに現れ、今日ではフランスの大部分に拡がった *poutre* 「梁」によって押しつけられたためである。この語の語源は *poutre* 「若い雌馬」と同じである。動物をあらわす語が職人階級において支柱としての「梁」をあらわすために用いられた⁴⁶。この場合 *poutre* 「未交尾の雌馬」が消滅したのは、「梁」との同音衝突に原因があるというよりも、盤石な *jument* が使用され続け、「若い、未交尾」をハイライトするときも *jeune jument* を用いることで事足りたからだと考えるのが自然であろう⁴⁷。ALF No.736 *jument* にはそもそも *poutre* 形の記載がなく、ユートが4地点のみと書いたのは ALF No.1070 *poulain* (*poulain pouliche*) 「生後5年目までの雄馬・雌馬」の地図である。実際、スイスの地点62で *pūdrē* が、ワロン地方の地点194では *polē* と並んで古形として *putrē* が、パ・ドゥ・カレ県 Pas-de-Calais の地点299では *pulā* と並んで *pūtr* が、サヴォワ地方の地点956では *pòlā*, *lānā*, *pòdrā* が記載されている。

以上のように考えると、フランス語の歴史を通して、ドーザが行ったように年代的に言語層の積み重なりがあり、これを地理的分布と関連づけて見つめ直すことは方法論的にも理論的にも興味深い。しかしながら書き言葉に関して言えば、歴史を通じて一貫して *jument* の語が用いられてきた。その意味でも *jument* は「雌馬」の上位概念を代表している語形とすることができる。この上位概念形とは別に用いられる、その周りに衛星の如く共存する語形があった。あるいは流れ星のように短期間だけ使用され消滅した語形もあった。言語層の積み重なりと言うよりは、むしろ求心と遠心構造の力学とも呼ぶべき現象である。中心には常に *jument* が据えられる。1300年以降に *ive* 形が中心から周辺へと衰退すると、*jument* が支配的となり、「荷馬」の意味内容を周辺化する。「荷馬」の意味内容は結局のところ *bête de somme* が取って代わる。同時に古フランス語期の「雌馬」の下位概念を表していたと思われる *liarde*、*poutre*、

⁴² Godefroy (1891-1902).

⁴³ ゴドフロワのこの記述は以下の分析からすると、おそらく「16世紀一杯まで」と修正したほうがよい。実際、17世紀の文法家イルソン Claude IRSON は *Nouvelle methode pour apprendre facilement les principes et la pureté de la langue françoise contenant plusieurs traitez* (初版1662年)において、“POVTRÉ vieux mot qui signifie *jument* qui porte le joug.” 「POVTRÉ は荷を運ぶ *jument* を表す古語」と記している。

⁴⁴ Dauzat (1921: 26).

⁴⁵ Jud und Jaberg (1908).

⁴⁶ Gamillscheg (1928: 42-43). 「荷運びの雌馬」と「梁」には「重荷を支える」という抽象的レベルでの共通性があるというのがユートの主張であった。Jud und Jaberg (1908: 90).

⁴⁷ あるいはJudが言うように *pouliche* 形が *poutre* の消失した後を補ったと考えるべきであろうか。Jud und Jaberg (1908: 81).

roncine、roncie 形も衰退していく。他方で南フランスあるいはイタリアから cavale が侵入し、一時は書き言葉の中で用いられ jument と勢力争いを繰り広げるが、それもわずか一世紀で周辺へと追いやられ、最後は南フランスと北部の方言の中だけで生き残った。

2.4. ALF におけるその他の語形

長い歴史の中にはたくさんの「雌馬」の下位概念を表す語形が存在したに違いない。ALF No.736 jument の地図にそうした痕跡をいくつか見ることができる。まず英語の mare に当たる mér がワロン地方の地点 190 にある。ソンム県 Somme の地点 263 で jument と併記されている ponèt は言うまでもなく、ponette 「雌の仔馬」である。また『ALF 補遺』⁴⁸によると、スイスの地点 969 に bidà = bidet 形があった。以上は説明が簡単であるが、パリ周辺とシャンパーニュ地方に見られる jubin 形はそうはいかない。この語形はドーザが語源不明とみなし⁴⁹、ヴァルトブルク Walter von WARTBURG の『フランス語語源辞典 *Französisches Etymologisches Wörterbuch*』(以下 FEW) でも同じ扱いを受けている。ALF ではセーヌ・エ・オワーズ県 Seine-et-Oise の地点 227 で観察される。またエーヌ県 Aisne の地点 230 とマルヌ県の地点 128 では jumã、jimã 等と併記されているが、いずれも古形という注記がある。たいへん興味深いことだが、ALF から半世紀以上経った後にパリ周辺部で方言調査を行ったシモーニ・オランブ Marie-Rose SIMONI-AUREMBOU は、『イル・ド・フランス、オルレアン地方言語民族誌地図』(ALIFO) の No. 540 jument の地図の上に、広い領域で jumã と jubin を記載することになる。また『シャンパーニュ、ブリー地方言語民族誌地図』(ALCB)の No.896 (une) jument でも、ブルスロ Henri BOURCELOT はマルヌ県の複数の地点で jubin を唯一の語形として記載した。ALF の古形という注記は被調査者たちの個人的な見解に過ぎないと考えられる。彼らはエドモンから質問を受け、おそらく上位概念を中心に答え、周辺的と判断した jubin のことを古形と答えたのだろう⁵⁰。ALIFO の欄外注を見てみると、jubin が「雌馬」の下位概念的な語形であることが容易に理解できる。たとえば地点 5 では「馬車用」とあり、地点 9 では「仔馬を産んでいない雌馬」の意味で、地点 10 では「速歩の雌馬」を指し、地点 59 では「bidè のように、2 輪馬車用の雌馬を jubin と呼んでいた」とある。このように jubin には様々な付加的意味があった。

これと反対に明らかに上位概念を中心に据えた回答も ALF には複数見られる。「馬 cheval」という最上位概念かつ通性的な語形を使用した回答がそれである。オワーズ県 Oise の地点 253 に gvèc = cheval がある。モルビアン県 Morbihan の地点 486 では jument と共に bêt dè ewa = bête de cheval が用いられ、スイスの地点 989 にも tsévà = cheval がある。ドーザによれば、こうした通性的な cheval 形の使用は jument と cavale の境界地域に起きるといふ。なぜなら境界地域では新たに移入される語形がないままに、古い語形 (èga 形) が消失するからである⁵¹。地理的基準からすれば一見もっともらしい解釈なのだが、地点 486 では通性形が jument と併用されており、新たに移入された語形が存在することは疑いの余地がない。ドーザのこの解釈ではパ・ドゥ・カレ県 Pas-de-Calais とソンム県 Somme における ALF の回答も同じ様に説明されることになる。両県では jument がほぼ全域に広がる中で、地点 276、278、279、285、288、289 において bêt à pulã = bête à poulain が見られる。地点 276 では同語形が jument と併用される。さらにコート・デュ・ノール県 Côtes-du-Nord でも地点 481 で bêt、482 で bêt (= bête)の回答がある。

ALIFO の欄外注のように、一つの語形 jubin でさえ様々な下位概念的意味があった。また ALF には明らかに上位概念の語形を用いて回答したと思われる地点が複数あった。これらのことから、ALF の調査

⁴⁸ Gilliéron et Edmont (1920: 113).

⁴⁹ Dauzat (1921: 27).

⁵⁰ 標準形が広く分布するパリ周辺部で行われた ALF の調査には同種の問題が少なくない。たとえば Kawaguchi (1994)における接尾辞-ette の分析を参照。

⁵¹ Dauzat (1921: 27).

は必ずしも「雌馬」の下位概念を表すような方言語彙をうまく拾い集めることができていないばかりか、上位概念が中心の地図上に複数の下位概念を表す方言形が複雑に混ざっていると考えられる。

3. 「雌馬」の下位概念とその命名をめぐる

タポレ Ernst TAPPOLET は「雌馬」の下位概念とその命名をめぐる問題の本質にいち早く気づいた研究者であった。彼は 1913 年のフランス語圏スイスにおける家畜の命名に関する論考において、「雌馬の語形は、より大きな領域に拡がっている語形(kavala, ega, jument)であるか、あるいは単に孤立して生起するかによって、はっきりと二つのグループに分かれる」⁵²と指摘した。タポレの分析から直接に刺激を受けたかどうかは定かではないが⁵³、四半世紀後の 1939 年にウダード WOODARD が師であるホームズ Urban T. HOLMES の始めた分析を引き継ぐ形で *Language Dissertation* の第 29 号として発表した『フランス語とプロヴァンス語における馬の語形：方言学における研究』は「雌馬」の下位概念を考察する時、今日でもその価値を全く失っていない。「雌馬」の下位概念という観点からウダードの分析を整理し直すと、表 2 のような結果になる⁵⁴。

表 2 ウダード(1939)における「雌馬」の下位概念と語形

下位概念	語形 「意味」
色彩	brunelo 「灰色の」、morette 「黒い」
価値	bronna, bèrègne, carne 「悪い」、zigue 「無価値の」
機能	bidette, bidet 「乗馬用の」
容姿	haquenée 「小格馬」、harin 「消耗した」、bida, bidette, cavalelo 「小さい」、caneio 「中くらいの」、chivalas, cavalasso 「太った」、pèque, rique 「痩せた」
生殖	pourie, pourière 「仔馬を産んだ」、puryero 「子連れの」、poute, poutre 「未交尾の」、mulassière 「ラバを産んだ」、vassive 「発情中の」
年齢	aridelle, hene, karkevala, marghalla, poutra 「老いた」、poedra, poutre, poutrenne, soradze, soreindja, vasif 「若い」、paudra, pudra 「2歳で若い」
歩法	houine, ouine 「嘶き扱いにくい」、carcan, mosquiu 「御しにくい」、bidète, haguette, haquenage, lambrino 「側対歩で進む」
その他	killa, mare, koumala, ruga 「雌馬」

下位概念を見てみると馬の様々な特徴を規準にしていることがわかる。「その他」の語形は意味が「雌馬」と記されているため、jument とほぼ同義と考えられる。表 2 の語形のうち ALF No.736 jument の地図には bida, bidette, mare のみが現れる。ウダードはその当時入手できた様々な方言集と FEW をデータとして分類を行ったが、それでも網羅的な語彙集とは言えない。表 2 の中で bidette 形は「機能」と「容姿」の両方に現れ、さらに bidète も類似の語形だとすれば「歩法」にも関連する。このように、ある語

⁵² “Die Stutenwörter teilen sich scharf in zwei Gruppen, je nachdem sie auf einem größeren Gebiet üblich sind (kavala, ega, jument) oder nur ganz vereinzelt auftreten.”. Tapolet (1913: 104).

⁵³ Woodard (1939)の膨大な参考文献の中に Tappolet (1913)がないことから、おそらくは参照していないと思われる。

⁵⁴ 単語の詳細な意味と使用地域については WOODARD (1939)を参照されたい。

形が *jument* と同義的あるいは類義的であると判断する時は、とくに対象が方言形の場合には、どれほど慎重に判断しようとし過ぎることはない。このことは語の置き換わりが同音衝突に深く関連していると主張する時も同じであろう。

おわりに

以前、筆者はフランス北東部における「稲光 *éclair*」を指す方言形を地域別言語民族誌地図を用いて分析したことがある⁵⁵。俗に「雷」と呼ばれる自然現象には三つの構成要素が関わっている。「落下」と「音響」と「発光」である⁵⁶。歴史的にもそれぞれが異なる語形に対応していた。ごく簡単に言うと、ラテン語では *fulgur*, *tonitrus*, *fulmen*、古フランス語では *foudre*, *toneire*, *espart*、現代フランス語では *foudre*, *tonnerre*, *éclair* である。ところが興味深いことに ALF には *foudre* の項目がない⁵⁷。No.1913 に *tonnerre* があるものの南フランスのみを対象にしている。結局 No.438 の *éclair* だけが全域で調査され、語形に関して研究ノートが書けるくらい方言形の種類が豊かである。このことは *foudre* 「落下する雷」が最上位の概念⁵⁸であり、それゆえ方言的変異が少なくジリエロンが調査項目に選ばなかったのかもしれない。それに対して *éclair* 「発光する雷」の語形は激しい有為転変を経験した。ラテン語の *flumen* は古フランス語で *espart* に置き換わり、*espart* は 15 世紀まで命を繋いだが、やがてフランス西部からやって来たと思われる *éclair* に圧倒されて書き言葉から姿を消した。「雷」を表す *éclair* と *foudre* と *tonnerre* のように、ALF の質問項目と方言形を上位概念・下位概念という観点から調べ直してみることは案外重要かもしれない。ALF には方言変異が極端に多い地図と非常に少ない地図があることは、ALF を詳細に調べるまでもなく明らかであり、ALF を少しでも見たことのある人ならば誰でも気づくことだからである。

参考文献

- Boisgontier, Jacques. 1984. *Atlas linguistique et ethnographique du Languedoc oriental (ALLOr)*, Vol. II, Paris: Editions du C.N.R.S.
- Bourcelot, Henri. 1966–1978. *Atlas Linguistique et Ethnographique de la Champagne et de la Brie*, Vol. I–III, Paris, Editions de C.N.R.S.
- Brun-Trigaud, Guylaine, Yves Le Berre et Jean Le Dù. 2005. *Lectures de l'Atlas linguistique de la France de Gilliéron et Edmont Du temps dans l'espace*, Editions du Comité des travaux historiques et scientifiques (CTHS).
- Coseriu, Eugenio. 1975. *Die Sprachgeographie*, Tübingen.
- Dauzat, Albert. 1914. “Essais de géographie linguistique (Suite) II. - Noms de femelles”, *Revue de philologie française et de littérature* 28e année, pp. 161-185.
- Dauzat, Albert. 1922. *Géographie linguistique*, avec 7 figures dans le texte, Paris : Flammarion.
- Dauzat, Albert. 1944. *Géographie linguistique*, 9 cartes, Paris : Flammarion.
- Desmet, Piet, Peter Lauwers et Pierre Swiggers. 2002. “Le développement de la dialectologie française avant et

⁵⁵ Kawaguchi (1998).

⁵⁶ 類似の発想は Goeman et al. (1988: 18)にもすでに見られる。

⁵⁷ それどころかローヌ地方言語民族誌地図(ALLR)の No.28、ブルゴーニュ地方言語民族誌地図(ALB)の No.23、フランシュ・コンテ地方言語民族誌地図(ALFC)の No.16 の *foudre* の地図を見ても *foudre* 形はほぼ存在せず、代わりに *tonnerre*, *feu du ciel* 形が見られる。

⁵⁸ Göhri (1912: 36)は *foudre* を「雷鳴」*tonnerre* と「稲光」*éclair* の中間にある語彙とした。文語的と言えるかもしれない。

- après Gilliéron”, *Géographie linguistique et biologie du langage: Autour de Jules Gilliéron*, Lauwers Peter. Marie-Rose Simoni-Aurembou et Pierre Swiggers (éd.), *Orbis Supplementa* 20, Peeters, pp. 17-64.
- Gamillscheg, Ernst. 1928. *Die Sprachgeographie und ihre Ergebnisse für die allgemeine Sprachwissenschaft*, Bielefeld und Leipzig: Verlag von Velagen & Klasing.
- Gardette, Pierre. 1967. *Atlas linguistique et ethnographique du Lyonnais (ALLy)*, Vol. I, Paris: Editions du C.N.R.S.
- Gardette, Pierre. 1971. “Frontières linguistiques et limites intérieures en Lyonnais d’après l’ALLy”, *Les dialectes romans de France à la lumière des Atlas régionaux*, pp. 141-171.
- Gilliéron, Jules. 1918. *Généalogie des mots qui désignent l’abeille d’après l’Atlas linguistique de la France*, Paris: Librairie Ancienne Honoré Champion.
- Gilliéron, Jules et Jean Mongin. 1905. “Études de géographie linguistique Scier dans la Gaule romane du sud et de l’est”, Paris: Honoré Champion.
- Gilliéron, Jules et Jean Mongin. 1907. “Études de géographie linguistique IX LE SEL”, *Revue de philologie française et de littérature* 21, pp. 292-296.
- Gilliéron, Jules et Edmont Edmond. 1902. *Atlas linguistique de la France Notice servant à l’intelligence des cartes*, Paris: Honoré Champion.
- Gilliéron, Jules et Edmont Edmond. 1902-1920. *Atlas linguistique de la France*, Paris: Honoré Champion.
- Gilliéron, Jules et Edmont Edmond. 1920. *Atlas linguistique de la France Suppléments* tome premier, Paris: Librairie Ancienne Honoré Champion.
- Goeman, A.C.M., H. Hogerheijde et P.J. Meertens. 1988. “Tonnerre, foudre, éclair”, *Atlas Linguarum Europae (ALE)*, vol.1 – Commentaires, Van Gorcum, Assen/Maastricht, Pays-Bas, pp. 3-78.
- Göhri, Karl. 1912. *Die Ausdrücke für Blitz und Donner im Galloromanischen. Eine onomasiologische Studie (mit 4 sprachgeographischen Karten)*, Inaugural-Dissertation, Universität Zürich, Hamburg.
- Jud, Jakob und Karl Jaberg. 1908. “Sprachgeographische Untersuchungen I. Poutre, II. Arocher, garocher, garoter, rocher, rucher - werfen”, *Archiv für das Studium der neueren Sprachen und Literaturen* 120, pp. 72-98.
- Kawaguchi, Yuji. 1994. “Suffixe *-ette* (< lat. *-itta*) en Champagne et en Brie à la lumière des Atlas Linguistiques”, *Zeitschrift für romanische Philologie* 110 (3-4): pp. 410-431.
- Kawaguchi, Yuji. 1995. “Extension du français moyen dans les dialectes (ALIFO, ALCB)”, *Parlure* 7-8-9-10, *Mélanges offerts au Professeur Jacques Chaurand*, pp. 259-275.
- Kawaguchi, Yuji. 1998. “Éclair dans les dialectes du Nord-Est de la France”, *Vox Romanica* 57, pp.138-155.
- Kawaguchi, Yuji. 2001. “À propos de la francisation des dialectes bourguignons”, *Mélanges de dialectologie, toponymie, onomastique, offerts à G. Taverdet*, vol.1, pp. 255-274.
- Kawaguchi, Yuji. 2007. “Is it possible to measure the distance between near languages? A case study of French dialects”, *Langues proches – Langues collatérales*, L’Harmattan, pp. 81-88.
- Kawaguchi, Yuji. 2017. “How Can We Depict Standardization in the Linguistic Atlas? Case Study of Champagne and Brie (ALCB)”, *Philologica Jassyensia* 24.2, pp. 237-250.
- Lauwers, Peter. 2002. “Jules Gilliéron: Contrainte et liberté dans le changement linguistique”, *Géographie linguistique et biologie du langage: Autour de Jules Gilliéron*, Lauwers Peter. Marie-Rose Simoni-Aurembou et Pierre Swiggers (éd.), *Orbis Supplementa* 20, Peeters, pp.79-112.
- Meillet, Antoine. 1921. *Linguistique historique et linguistique générale*, Paris: Librairie ancienne Honoré Champion.
- Meillet, Antoine. 1925. *La méthode comparative en linguistique historique*, Oslo: H. Aschehoug & Co. (W.

Nygaard).

Nauton, Pierre. 1956. "Atlas Linguistique et Ethnographique du Massif Central", *Revue de linguistique romane*, 20, pp. 41-65.

Nauton, Pierre. 1955-61. *Atlas Linguistique et Ethnographique du Massif Central (ALMC)*, Vol.I-IV, Paris: Editions du C.N.R.S.

Poirot, Jean. 1913. "Lorrain *pmot*, *kmot* = pomme, pomme de terre", *Neuphilologische Mitteilungen* 15, pp. 83-87.

Pop, Sever et Rodica Doina Pop. 1959. *Jules Gilliéron vie, enseignement, élèves, œuvres, souvenirs*, Centre international de Dialectologie générale, Louvain.

Simoni-Aurembou, Marie-Rose. 1973-1978. *Atlas linguistique et ethnographique de l'Ile-de-France et de l'Orléanais : Ile-de-France, Orléanais, Perche, Touraine*, Vol. I et II, Paris, Éditions de C.N.R.S.

Tappolet, Ernst. 1913. "Die Ursachen des Wortreichtums bei den Haustiernamen der französischen Schweiz", *Archiv für das Studium der neueren Sprachen und Literaturen* 131, pp. 81-124.

Woodard, Clement Manly. 1939. *Words for Horse in French and Provençal: A Study in Dialectology*, *Language* 15, No.2, *Language Dissertation* No.29, pp.5-84.

Base Textuelle Frantext. <http://www.frantext.fr/>

Corpus de la littérature médiévale en langue d'oïl des origines à la fin du XV^e siècle Prose narrative – Poésie – Théâtre, Champion Électronique, 2001.

Godefroy, Frédéric. 1891-1902. *Dictionnaire de l'ancienne langue française et de tous ses dialectes du IX^e au XV^e siècle*, Paris: Librairie Émile Bouillon.

Grand Corpus des grammaires françaises, des remarques et des traités sur la langue (XIV^e-XVII^e s.), Classique Garnier Numérique. <https://www.classiques-garnier.com/numerique/>

Tobler-Lommatzsch. 2002. *Altfranzösisches Wörterbuch*, Edition électronique conçue et réalisé par Peter Blumenthal et Achim Stein, Stuttgart: Franz Steiner Verlag.

Trésor de la langue française informatisé. <http://atilf.atilf.fr/tlf.htm>

Wartburg, Walter von. 1922-2002. *Französisches Etymologisches Wörterbuch (FEW)*, Tübingen: J.C.B. Mohr. <https://apps.atilf.fr/lecteurFEW/>

執筆者連絡先: ykawa@tufs.ac.jp